学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究*

—第 二 報 告—

島根大学教育学部

小 川 一 夫**

I 問 題

さきの第一報告(1)においては、担任学級児童の社会構造を教師がどの程度正しく観察しているかという問題を、教師の日頃の観察の評価と児童に課したソシオメトリーを比較することにより究明した。その結果、一般に学級の人気児童についてはこれをかなりよく観察している(一致度65.5%)にも拘らず、孤立児童に関しては殆んど全てを見誤っている(2.9%)し、又排斥されている児童はそれらの中間である(39.2%)という教師の態度が考察された。

この報告にあつては、学級での人気児童、排斥されている児童、及び孤立児童の三群に於て、どのような児童が教師の日常の観察で見誤られるのだろうか、換言すれば、如何なる児童が教師から積極的に見すぎを受けたり、消極的に見落されたりするかという問題を、さきの研究に引続き分析的に追求することにより、学級の社会構造に対する教師の態度を解明したいと考える。

II 研究 方 法

1 対 象

この研究で用いる諸調査の信頼度を考慮して、第一報告での対象、松江市N小学校(15学級)のうちより低学年を除き、3年以上(10学級)の全児童及びその学級担任教師を対象とした。従つて、そのうち、教師の観察的評価かソシオメトリーで、学級の人気児童、排斥されている児童、孤立児童のいずれかに該当する者160名が直接この研究の対象となるわけである。ところがそのうち3名は途中転校あるいは入院などの特別な事情で、どうしても資料を求めることが不能となり、実際には157名(男83, 女74)について研究がまとめられた。それらの

者を、教師の観察とソシオメトリーの結果の一致したもの(正しく教師が観察していると解されるもの)と教師の見誤つたもの(このうちには二種の誤りが考えられる)とに区分して、該当児童群別に示すならば Table 1 の通りである。

Table 1 被調査児童

比較 群	一 致	見誤り (不一致)		計
		積極的過誤	消極的過誤	
人気児童	33	9	12	54
排斥児童	23	11	23	57
孤立児童	3	18	25	46
計	59	38	60	157

2 調査時期

昭和29年12月～30年2月

3 調査方法

如何なる児童が教師から見誤られるかを分析する場合、いろいろ多くの角度から当該児童を調査すべきであるが、ここではとりあえず学業成績と性格の二方面から研究することとした。

学業に関しては、担任学級の全児童について教師の5段階評定を求めた。性格に関しては、榊原氏乙式向性検査(自己評価用)を児童に課し、又別に小学校指導要録で用いている行動の記録(22項目)を担当教師に評定してもらつた。

4 整理方法

学業成績についての評定段階値、向性検査の向性指数、行動記録の各項目の段階値はことごとく、各学級ごとに偏差値(T-Score)に換算し、児童の学級内における相対的位置を明らかにした。というのは、同じ120なる向性指数であつても、ある学級ではそれが最も外向的であるのに、他の学級では中位であるという場合もありうるし、教師の学業成績の評定については各教師の評定

* A Study of the Teacher's Attitude toward the Social Structure of Children in Classroom (NO. II)

** by Ogawa, Kazuo (Shimane University)

規準が一定でないことは明かだし、又行動の記録においては、教師のみならず項目によつてもその頻数分布の状態が異なることを考慮に入れて、むしろここでは、各児童の学級内部での学業や向性についての相対的位置が重視され問題にされねばならないと考えたからである。

なおその上に、行動の記録 22 項目については、林重政氏(3)(4)の因子分析による結果に基づいて、Table 2 の如き四因子群による考察を試みた。

Table 2 行動の記録の四因子群

因子	行動の記録項目	因子の特性
第一因子	8 計画工夫する	自主的特性 個性的、独立的なものとして、他からの圧迫や干渉を受けないようなもので、環境場面に對する反応の特性
	9 自制心がある	
	10 自分で判断する	
	11 正義感がある	
	12 正しく批判する	
	13 安定感がある	
	14 指導力がある	
第二因子	17 きまりを理解して守る	対人的特性 対人的關係にその効をあらわすもの
	15 態度が明るい	
第三因子	2 ひとを尊敬する	対人的特性 社会生活に順応するための必要条件
	3 ひとの立場を受入れる	
	4 ひとと協力する	
	16 礼儀が正しい	
第四因子	5 仕事を熱心にする	自律的特性 自己自らを制御せんとするもの
	6 責任を重んずる	
	7 持久力がある	
	18 探究心がある	
	19 美への関心を持つ	
	20 衛生に注意する	
第五因子	21 勤労を喜ぶ	
	22 物を大事にする	

III 結果及び考察

1 人気児童について

54名の人気児童について、学業成績及び向性に関する偏差値を7段階に区分し、両者の関係を一致児童、積極

的過誤児童、消極的過誤児童別に示すと Fig. 1 であり、又ここらにそれらの三比較群別に偏差値の平均値と標準偏差値を算出した。(Table 3)

Fig 1 人気児童群における学業と向性の関係

Table 3

人気児童群における偏差値の平均及び S. D.

比較群		一致 (33名)	積極的過誤 (9名)	消極的過誤 (12名)
調査	向性	53.12	56.06	53.00
	S. D.	7.51	6.72	9.52
学業	M	63.18	60.85	60.64
	S. D.	5.93	6.95	8.99

教師の平素の観察とソシオメトリーの一一致度が最も高い人気児童について、先ず図から總体的に考察されることは、学級内で性格のより外向的な且つ学業成績の比較的上位の者が、教師によつても挙げられているし、又同時に学友によつても選ばれてくるということである。ところでかかる一般的傾向から著しく逸脱しているのは、教師から見落された向性 3、学業 3 の段階に相当する児童[A. S.] (6 年男児) である。この児童が級友によつて人気者にあげられている様相を、さきに実施した 3 回のソシオメトリー (1 月間隔で実施) の結果から検討すると、Table 4 に示す如く第 1 回には +G. I. 20.0 で学級 (41 名) 内の 12 名によつて推挙され人気者の第 3 位であり、第 2 回 (+G. I. 22.6) は同じく 12 名により第 5 位に、更に第 3 回 (+G. I. 13.8) は 10 名により第 8 位にあげられている。その人気の度合は次第に低下し

Table 4 [A.S.] のソシオメトリーの結果

回 数	第 1 回	第 2 回	第 3 回
+ G. I.	20.0	22.6	13.8
- G. I.	4.5	4.1	7.7
好かれる 主な理由	一緒によく遊んでくれる。 親切でよく物をかしてくれる。		
+G. I.積極的グループ社会距離比*			
-G. I.消極的グループ社会距離比			

ているが、一応人気者の地位を保っているし、愛好される理由も社会的、性格的なもので他の人気児童と格別異なるものでもない。たしかに教師の見落した児童とみてよいであろう。

従つてさらに、各項目ごとに偏差値に換算した本事例の行動記録のプロフィール (Fig. 2) をみると、個人内変異の点で、第二因子 (対他的特性) と第三因子 (対人的特性) がすぐれ、特に第二因子が著しいという極めて特徴的なものを認めることが出来る。人気児童群のうち、教師が見落した児童12名のプロフィールを通覧すると、四因子について個人内変異のあまりみられない者が大部分で、特徴的な型を示すのは本事例の外にこの項の後にあげる二つの事例のみであり、それらのうちでも、第二及び第三因子のすぐれた特徴的な型を現すのは本児だけである。そうした型を他の積極的過誤群では3例、一致群では5例抽出することが出来るので、教師が対他的、対人的特性のすぐれた児童を人気者と見做す態度はある

Fig 2 [A.S.] の行動の記録プロフィール

* 第1報告では「グループ社会距離指数」とよんだが、その性質から考えてむしろ「グループ社会距離比」とすべきであろう。ここで訂正する。

ようだ。然し積極的過誤群や一致群のそれらがごとく学業成績で比較的上位の段階にあることから考えて、この事例[A.S.]の場合、明らかに学業成績が見落しの有力な要因になっていると思われる。以上のことから、結論的には、向性の方はとにかくとして、学業成績のやや低い段階にある児童が何らかの理由で——行動の記録からすれば、第二及び第三因子のすぐれている場合——級友から大いに愛好される場合には、その児童を教師は見落としやすいのではないかと推測される。かかる事例はあるいは少いかもかもしれないが、高学年に於ては多少共該当する児童が現れてくるのではないかと考える。今後そうした児童を特に求めて、教師の態度をさらに検討して行く必要を痛感する。

次に、積極的過誤と消極的過誤の間のずれを Table 3 でみると、向性、学業共に統計的には有意な差を認めることは出来ないが、向性の積極的過誤に於ける平均値が消極的過誤のそれより高いことから、どちらかといえば教師はやや外向的な児童に眼を向けがちである傾向を捕捉することが出来る。

ところで、この傾向から逸脱する最も代表的なものを求めるならば、向性6、学業6の段階に位置する教師の見落した児童[Y.A.] (6年男児) である。この児童の3回のソシオメトリーの結果 (Table 5) では、第1回が学級 (39名) 内の17名によつて選ばれ人気者の第5位であり、第2回は14名により第2位に、更に第3回も同じく14名により第2位にあげられている。学級での人気は次第に向上する傾向にあるようだ。ところで行動の記録

Table 5 [Y.A.] のソシオメトリーの結果

回数	第1回	第2回	第3回
+ G. I.	22.2	28.6	26.3
- G. I.	4.9	2.7	0
好かれる 主な理由	親切である。 勉強をよくする。		

のプロフィールを検討してみると、Fig. 3 の如く第二因子のうち「人と親しむ」の項目で少し劣る個人内変異がうかがえる。学友の愛好する理由とはいはささか矛盾するわけであるが、追跡調査の際の教師の言では、「人気児童としてもう一名多くあげるとすればこの[Y.A.]を記載するつもりであつた」と報ずるのであるから、本事例は完全な見落しに該当する児童でなく、むしろ教師に課した調査が列挙人員を規定しない任意な方法であるところに起因する、いわば準一致児童と実質上は見做すべきことが判明した。念のため他の見落し児童についても

Fig 3 [Y. A.] の行動の記録プロフィール

教師にこの点を確めたが、かかる原因から見落しになったものは外にはないようであつた。

然しながら、ここで、教師の見誤つた(積極的及び消極的過誤)児童の中に、上例の示す如く第二因子が他の因子に比べて劣るような個人内変異を、その行動記録のプロフィールにもつ者はいないかと確かめると、殆んどどの児童が四因子について格別顕著な変異を示さないうちにあつて、1名だけ典型的ともいふべき第二因子の劣る個人内変異を現す事例を、消極的過誤の群に見出すことが出来た。事例[K. K.] (6年男児、向性5段階、学業5段階)である。(Fig. 4)プロフィールによると、「人と親しむ」及び「態度が明るい」の面が他の項目に比べて劣ると担任教師が評定しているわけであるが、例によつて3回のソシオメトリーの結果を検討してみるならば、Table 6の如き状態で、その程度は第1回が41名中

Fig 4 [K. K.] の行動の記録プロフィール

Table 6 [K. K.] のソシオメトリーの結果

回数	第1回	第2回	第3回
+ G. I.	39.5	33.8	29.2
- G. I.	0	0.5	0

好かれる
主な理由

親切でおとなしい。
一緒にあそぶ。

21名によつて選ばれて人気者の第1位であり、第2回が18名によつて第2位に、第3回が14名によつて同じく第2位というように、極めて安定した地位を保持していて、その理由も教師の評定とはむしろ逆に、親切、協同性を大いに認めることが出来る。従つて、教師のみるところと子供の世界とが完全にくいちがつている場合である。この報告で使用した研究方法の範囲内では、かかる両者のずれが何故発生するかを解明し得ない。しかしながら、かかるくいちがいの著しい事例を更にいろいろの角度から深くさぐる時、窮極の課題として志向している教師と児童の人間関係が究明されてくるであろうと考えるが故に、一層かかる事例を今後求めて研究を続けたいと念ずる。ここでは遺憾ながら単に問題の発見の段階で止まらざるをえない。

2 排斥されている児童について

排斥されている児童57名について、偏差値で学業成績と向性の関係を、さきの人気児童の場合と同様に一致児童、見誤り児童の別にあけてみると、Fig. 5及びTable 7の通りである。

Fig 5 排斥児童群における学業と向性の関係

先ず図をみてわかるように、さきの人気児童が比較的学業の上の段階に集つていたのに反して、排斥される児童にあつては、教師の挙げる者も又ソシオメトリーであがつてくる者も共に学業成績の比較的低い段階に多いことが注目される。然し向性の面ではかなり分散している。

Table 7 排斥児童群における偏差値の平均及びS. D.

比較群		一致 (23名)	積極的過誤 (11名)	消極的過誤 (23名)
調査	向性	M	51.15	49.85
	S. D.	12.20	8.81	10.58
学業	M	41.95	45.13	41.20
	S. D.	7.92	11.14	9.54

ところで、学業成績の5段階以上に属す児童が6名おり、それらは一致が1名、見すぎ2名、見落し3名であることからして、学業成績のすぐれた者は排斥される児童としてあがるのが全体的には少ないけれども、少ないながらもそれらについて教師はあまり正しい社会的評価をしかねるようである。

ここで問題になる学業5段階以上の6児童について、更にそのソシオメトリーの結果や行動の記録を検討してみよう。まず向性7、学業5の段階に相当するいわば例外的な一致児童〔T. Y.〕(6年男児)について、担任教師の列挙理由をみると、「乱暴で悪賢いところがあり人とよく争う」と記され、又学級の児童(41)名からは3回のソシオメトリーで Table 8 の示す如く、嫌われる度合が第1回で学級の第2位(20人)、第2回が第3位(19人)

Table 8 〔T. Y.〕のソシオメトリーの結果

回数	第1回	第2回	第3回
+ G. I.	6.5	9.2	11.3
- G. I.	33.0	31.3	21.0
嫌われる 主な理由	悪口、あだ名をいう、 なぐる、いばる。		

第3回が第3位(11人)であり、教師の観察が妥当している。そして行動の記録のプロフィールは Fig. 6 のように、どの因子も大体 35~45 の偏差値の線で一定していて、個人内変異が認められない。よく検討してみると、このプロフィールは排斥児童に該当するもののうち、教師評価とソシオメトリーの結果とが一致する児童(23名)のプロフィールで認めることの出来る明瞭な特徴の一つである。即ち一致児童のプロフィールからは、(i)一般にプロフィールの線が低い偏差値(30~40)のところでは引かれるし、又(ii)第二又は第三、特に第三の因子の劣る個人内変異を示す児童の多い(第二因子の劣る者3名、第三因子11名、第二及び第三の両因子共に劣るもの1名)特徴を捉えることが出来るからである。

ところが、学業成績の比較的高い位置にあつて、教師に見誤られる者、即ち積極的過誤児童(2名)及び消極

Fig 6 〔T. Y.〕の行動の記録プロフィール

的過誤児童(3名)にあつては、全て偏差値 55~65 あたりのやや高い行動記録プロフィールを示している。そして積極的と消極的の両過誤の差異はあまり認められず、敢えて挙げるとすれば、前者が行動の記録の各項目間であまり変異のない安定した型であるのに対して、後者のそれは少々凹凸の多い型であるといえよう。この中の代表として、積極的過誤の1名の児童〔H. N.〕(4年男児、向性4段階、学業6段階)について、ソシオメトリー及び行動の記録プロフィールを掲げておこう (Table 9, Fig 7)。なお担任教師の排斥児として当該児童を列

Table 9 〔H. N.〕のソシオメトリーの結果

回数	第1回	第2回	第3回
+ G. I.	5.5	8.7	14.3
- G. I.	5.0	2.1	0

Fig 7 〔H. N.〕の行動記録プロフィール

挙げた理由は、「大声で騒ぎ、弱者をいじめる。又他人のいうことを聞かない」というのであった。

以上のように、学業成績の比較的上位のものについて教師の正しく観察している者と見誤っている児童を比べてみると、学業はすぐれていても行動の記録の劣るような者については教師もこれを排斥児と正しく評価するようであるが、行動記録の割合すぐれている児童では見誤りの生じやすいことが推察される。遺憾ながら、ここでも教師の態度の核心に迫る積極的過誤と消極的過誤の差異については充分解明が出来ない。

次に、表から考察すれば、統計的には有意な差を認め得ないけれども、学業成績の極めて悪い児童はどちらかといえば教師に見落され易い傾向のあることをうかがうことが出来よう。

3 孤立児童について

最後に孤立児童(46名)についてであるが、この群は教師の見誤りの最も多いもので、僅に3名のみが正しく観察されているにすぎない。これをさきの考察と同様に向性と学業の両面よりみるならば(Fig 8, Table 10), 積極的過誤と消極的過誤を比べた場合、どちらかといえば学業成績のより低い方に積極的な過誤が多い。このこと

Fig 8 孤立児童群における学業と向性の関係

Table 10 孤立児童群における偏差値の平均及びS. D.

比較群		一致 (3名)	積極的過誤 (18名)	消極的過誤 (25名)
調 査				
向 性	M	—	51.13	49.23
	S. D.	—	10.72	8.29
学 業	M	—	40.79	48.42
	S. D.	—	8.57	7.80

学業の消極的過誤と積極的過誤の差

$t = 2.96$ ($P < 0.01$, d. f. = 41)

は統計的にも有意な差(危険率1%以下)を認め得るので、明らかに教師は比較的学業成績の低い児童の方へ眼を向けがちであるといえる。教師が孤立児を正しく評価しえない原因の一つがここにあると思う。

ところで、如上の傾向から著しく逸脱する事例を抽出するならば、学業5の段階にある積極的過誤の2名と、学業2の段階に位置する消極的過誤の1名である。先ず積極的過誤の方から分析的に考察しよう。孤立児童としてあがる者の中で、積極的過誤に該当する児童(18名)の行動記録プロフィールから求められる特徴的な傾向は、次の2点にまとめられる。即ち(i)一般にそのプロフィールが偏差値30~40の低いところで画かれているということ(該当16名)と、(ii)その個人内変異をみた場合、第二因子あるいは第三因子に於て劣る者が多いということ(第二因子の劣る者6名、第三因子の劣る者6名、第二及び第三因子の劣る者2名)である。そしてこの中で今問題になる学業5段階に属す2事例、[H. O.] (6年女児)(Table 11にソシオメトリの結果を示す)と[M. K.] (6年女児)(Table 12)について検討して

Table 11 [H. O.] のソシオメトリの結果

回数	第1回	第2回	第3回
+ G. I.	2.5	0.5	0
- G. I.	7.5	7.2	6.2

Table 12 [M. K.] のソシオメトリの結果

回数	第1回	第2回	第3回
+ G. I.	5.0	8.7	5.6
- G. I.	12.0	12.8	9.2

Fig 9 [H. O.] の行動記録プロフィール

Fig 10 [M. K.] の行動記録プロフィール

みると、極めて特徴的なものを把握することが出来る。即ち (i) の点ではこの2児童のみが例外で、他の全ては 30~40 の偏差値でプロフィールを示すに対して、50~60 辺のすぐれたプロフィール (Fig. 9. Fig. 10) なのである。又 (ii) に関しては、第二及び第三の両因子共に個人内変異で劣るという明瞭な特性が認められる。

従つて教師は行動記録の示すような特性のあまりよくない者を学級の孤立児と見做し勝ちであり、特に対他的あるいは対人的特性の劣る児童に注目していることに気付く。そして個人内変異で対他的、対人的特性の著しく劣る者については、全般的に行動の特性が少々すぐれていても、又、学業が比較的良好出来ても、これを孤立児と見誤りやすいようである。教師から見落されてはいるがソシオメトリーではあがつてくる孤立児童の多くが、又両方であがつてくる所謂一致児童の全てが、その行動

Table 13 学業4段階以下の積極的過誤児童の教師列举理由とソシオメトリー結果

学業段階	向性段階	学年	児童	性	符号	教師列挙理由	ソシオメトリー						
							第1回		第2回		第3回		
							符号	+G.I.	-G.I.	C.I.	-G.I.	+G.I.	-G.I.
4	6	4	Y. O.	男	×	うそをつき、ずるくて争が多い	×	2.5	27.5	3.6	24.5	0	25.2
4	3	6	S. Y.	男		自己本位で我が強い	△	7.0	2.5	9.2	0.5	6.7	0.5
3	6	6	M. U.	女	×	出しやばりで思慮浅く、友人とよく争う、口がなかなか達者	×	0	30.5	0	37.9	0	53.3
3	4	3	K. Y.	女	×	争が多い、よくすねる	×	0	30.8	0	37.4	0	33.0
3	4	3	T. I.	男	○	身体具合悪く、人なみのつきあいが出来ない	×	1.9	25.6	2.8	23.9	1.1	20.5
3	4	4	T. F.	女	○	無口で自分の方から孤立している、他人になじめない	×	0.5	19.0	0	12.3	2.4	10.5
3	4	6	K. M.	女	○	内気でしかもやや怠惰性があり、自分から孤立していて、人がやさしくしてもついてこない。ややひねくれている	△	0.5	4.3	4.3	1.1	2.6	3.2
3	3	3	S. S.	女	×	よくすねてわがままである	×	7.5	24.4	2.2	13.3	2.8	24.9
3	3	5	K. I.	女	○	ほとんどのものをいわない	×	0	10.8	0	23.8	0	17.9
3	3	6	M. Y.	男	○	本人自身孤独を好む、別に性格的欠陥みあたらず	△	1.1	3.7	0.5	10.0	3.7	1.6
3	2	4	K. D.	男	×	遊んでいてもすぐ喧嘩になるから	×	4.0	31.0	0	46.7	2.4	30.5
2	6	5	Y. T.	男	×	学習上他人に迷惑をかけるから	×	0	33.3	0	32.8	1.0	42.6
2	5	5	T. T.	男	○	ものをいわない、家庭貧困、父親冷淡	△	0	9.2	0.5	5.9	2.6	4.7
2	4	3	K. J.	男	○	他人とつきあおうとしない	×	2.5	21.3	1.7	30.0	1.7	34.6
2	4	5	M. M.	女	○	無口で消極的である、住居の関係で友人なく登校時も一人	×	5.0	15.6	0	12.7	3.3	12.2
2	3	3	M. I.	男	○	友人とつきあおうとしない	×	0	57.3	0	41.3	0	60.5

〔理由〕 ○……孤立児相当の理由と認められるもの [ソシオメトリー] ××……明らかに排斥児(-G.I. 20以上)
 ×……排斥児に関する理由と考えられるもの ×……準排斥児(-G.I. 10~20)
 △……準孤立児(G.I. 計 10以下)

記録プロフィールにおいて偏差値 40 前後の所で比較的個人内変異の少ない型を示す事実から考えて、孤立児に対する前者の教師の態度は一応許されるとしても、後者の第二或いは第三因子の劣る者を孤立児と考えがちである点は更に吟味を要すると思う。

既に考察して来た排斥される児童の一致群のプロフィールの特徴が、これと同じであつたことがさしあたり思い出される。加えて今組上につけている〔H. O.〕〔M. K.〕二事例（特に後者）の教師列挙理由をみると、〔H. O.〕——「勝気で甘えつ子であり、かげ口をよくいう。」〔M. K.〕——「出しやばりで我が強く、おしやべりで人の悪口をよくいう」というように、むしろ排斥児的理由であり、結果的にも排斥児に傾くものであることが、ソシオメトリーで物語られているのを考慮すると、教師の孤立児に対する態度が排斥児に対するそれと極めて相似していること、従つて排斥される傾向の児童を教師は孤立児とみがちではないかということが感ぜられる。

そこで、この二事例以外に、学業 4 段階以下でしかも積極的に教師に見誤られた児童 16 名について、その学級内での社会的地位あるいは教師の列挙理由を改めて検討してみると (Table 13)、教師の当該児童を孤立児として指名する理由自体に排斥児相当のそれが多くあらわれており (6/16)、このことから教師が孤立児童と排斥児童を混同しているのを充分うかがい得る。なお、教師の列挙理由と第 1 回のソシオメトリーの結果に基づく児童の社会的地位を対照させてみれば、一層これが明瞭になる。即ち、教師は社会的孤立状態にある児童をみるつもりであつても (妥当的理由の場合 9/16)、結果的にはその殆んど (6/9) が、明らかに排斥児童又はそれに近い児童を孤立児と見誤っていることが考察される。全体的にみても、比較的孤立に近い者を孤立児と見誤っている場合は極めて少なく、(4/16)、他はことごとく排斥され勝ちな者を孤立児と見誤っているものであり、人気児の方へ偏つている者は一人もあげられていない。

第一報告でも述べた如く、孤立児に関する見誤りが量的に最も大であつたが、こうしてその誤りは質的にも著しいものがあり、殆んどが排斥児童の方へ傾いているといえる。勿論、排斥される結果として、次第に学級内で孤立化してくる場合のありうることを否定するものではないが、一応排斥と孤立の両者は明確に区別づけられることが望ましいと考える。普通一般の教師にあつては、こうした排斥児と孤立児に対する態度の未分化性を指摘出来よう (6)。

学業の低い方へ教師が眼を向け勝ちである傾向に関し、例外として求められた他の一事例は学業 2、向性 3

段階にある消極的過誤児童 (Y. I.) (6 年女児) である。ソシオメトリーの結果 (Table 14) からみて、この児童は次第に排斥される方へと向つてはいるが、一応学級の孤立児と見做してよからう。しかるに教師はこれを孤立児として全然列挙しなかつたのであるが、その行動記録

Table 14 〔Y. I.〕のソシオメトリーの結果

回数	第 1 回	第 2 回	第 3 回
+ G. I.	0.5	0	0.5
- G. I.	1.1	3.7	8.9

Fig 11 〔Y. I.〕の行動の記録プロフィール

プロフィール (Fig 11) を検討してみると、対他的、対人的特性が相対的評価で普通に近く、他の特性はやや劣り、個人内変異からいえば第二、第三因子が少々すぐれている型である。既に述べて来たように、孤立児童に対する教師の態度は排斥児童に対するそれと類似していて、全般的に行動特性が劣ると同時に、どちらかといえばその個人内変異が第二あるいは第三因子の低い型でしかも学業成績の悪い者をあげがちであつた。教師に見落されている本事例は、如上の特性中第二、第三因子について明らかに逆の関係にある。学業の低い段階にあるこの児童をして例外たらしめている原因の一端がここにあるのではなからうか。又さきに積極的過誤の事例について考察した、第二、第三因子の劣る者を教師は孤立児と考えやすいということをこの事例が裏書きしていると思う。そして教師の評定した行動記録が妥当であるとすれば、本児の人気の度合はもう少し増してもよさそうである。然し「不潔である」という特定の理由で孤立的から排斥される方向へ変動していることがソシオメトリーの分析から知れる。

教師から見落された他の孤立児の大部分が行動記録のプロフィールで示す特徴は、それが偏差値 40 前後のものであることと、あまり凹凸のない比較的平凡な型であることである。前者は教師が積極的に見誤つた児童にも認められるからよいとしても、後者は教師が見誤りの最も多い孤立児に対する態度を反省する場合、新しい転換の方向を示唆するものと思う。

IV 要 約

担任教師が学級の社会構造をどの程度日頃の観察で正しく把握しているかという問題を、教師に対する調査と児童に対するソシオメトリの比較から研究してきたのに引続き、この報告では両者のずれを示すのはどのような児童であるかの問題を想定し、性格と学業の両視点から考究して、児童に対する教師の態度を解明しようとした。得られた主な結果を概括するならば次の如くまとめられる。

(1) 平素の観察で教師がかなりよく捉えている学級の人気児童については、それらが比較的学業成績上位、向性外向的の方へかたまっている。

(2) それらについては、教師がやや外向的な児童の方へ眼を向けがちであるようだ。

(3) 従つて、もし学級内に学業成績が低く、且つ内向性の児童ではあるが、対他的、对人的特性にすぐれていて友人から愛好される者がいる場合には、教師はこれを人気児童と考えないで見落しやすいのではないかと思う。

(4) 排斥される児童は、それに反して、どちらかといえば学業成績の劣る方に集る傾向があるが、といつて極めて学業の悪い成績のものには教師は眼を向けないようで、そうした児童は多く見落される傾向にある。

(5) 又学業の比較的優秀な成績の者は排斥児に該当することも稀ではあるが、かかる児童が学級にいる場合には教師はそれらの社会的評価をあまり正しくしかねる。

(6) 全然といつてよい程、教師は孤立児童を正しく観察していない。それは教師が学業成績の悪い者の中に孤立児を求めようとして、学業成績中位の平凡な孤立児を見落し勝ちであることに起因する。

(7) 更に教師が孤立児として指摘する理由やその積極的過誤の度合をみると、排斥される児童と孤立児童に対する教師の態度が充分に分化していないようで、結果的には、明らかに排斥児又は排斥児に近い者を孤立児と見做しているのが殆んどであり、比較的孤立に近い児童があげられる場合は極めて少ない。

(8) 以上の如く向性と学業の二つを比べた場合、教師

はとかく外向的な児童に眼を向けがちではないかとの当初の予測に反して、むしろ教師の態度には学業成績の方がより強く影響していることをうかがい得る。

V 発展課題

この研究で反省される主要な事項を次の発展の拠点として記しておこう。

学業と性格の面からの分析が問題の解明を期待した程なし得なかつた。これは教師の態度を更に有力に規定している別の諸要因の存在することを物語るものであろう。Gronlund, N. E. (6) が教師には「自分の愛好している児童が学級でも愛好されているだろうと過大評価する傾向などの主観的偏向が認められる」と述べているがこうした教師の主観的条件に注目し、さらにはかかる主観的条件を規定しているであろう児童の家庭の社会的、経済的背景にまで研究を進めて行く必要を痛感する。

別に、教師の態度を規定している条件を一義的に求めようとする自体が反省されないでもない。問題が教師のパーソナリティと児童のパーソナリティ間の相互作用に関連するだけに、一人一人の子供のもつ特性を抽象化しては問題が解明されないかもしれぬ。個々の児童と教師の間には、それぞれユニークな要因が働くと考えられる。とすれば、研究は事例中心的なものに縮少深化してこそその成果を期すことが出来よう。

一見矛盾するこの二つの立場が相補い、窮極においては教師の態度に関するこの問題を縦横から解明してくれるのかもしれない。御批判、御示教下されば幸である。

最後に数次の調査や資料の提供にあたつて、心よく協力いただいた対象校の諸先生方に厚く感謝の意を表す次第です。

文 献

- (1) 小川一夫：学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究(第一報告), 教育心理学研究, 第3巻, 第4号, 昭31, pp. 40~47
- (2) 榊原清：向性検査, 金子書房
- (3) 林重政：性格評定の因子分析的研究, 中四国九州地区心理学会発表, 昭24
- (4) 三好稔：個人差を分析する, 児童心理, 第8巻, 第6号, 昭29, pp. 10~18
- (5) 小川一夫：児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究(第二報告), 島根大学論集, 第6号 昭31, pp. 1~14
- (6) 兼子宙：学級集団の研究法, 児童心理, 第9巻, 第9号, 昭30, p. 91

—1956年2月23日受稿—

without any particular incentive as a control group. Of course, these three groups were formed at random, and they received praise and reprimand irrespective of their actual achievements. On the fifth day the experiment was carried out in the same manner.

On the sixth day the first group was told that their members had good characters. The second group was told that their members had undesirable characters, and their names were given public notice.

Results :

The amount of performance for each group was recorded and was compared with that of the other groups. Findings from the results are as follows :

In introversion: In both social and rathymia introversion, the control groups show the most satisfactory improvement; the praised groups show improvement; and the reprimanded groups do not show even their original achievement and turn to worse. In depression type, the praised group shows

the most satisfactory improvement; next comes the control group, while the reprimanded group receded. (Tables 2~4, 6~8 and Fig. 1, 2).

In extroversion: In rathymia extroversion, the reprimanded group shows an improvement; next comes the praised group, and last the control group. In social extroversion and depression extroversion, both the praised groups and the reprimanded groups show an improvement.

Taken all together, in introversion the most effective incentive is to be praised, the worst is to be reprimanded. In extroversion, the praised group, the reprimanded and the control group all show improvement and there is hardly any difference between the three groups. Generally speaking, the introversion groups show more improvement than extroversion groups with or without incentive,

When reprimanded, the introversion groups show worse performance as compared to the extroversion groups.

A STUDY OF TEACHER'S ATTITUDE TOWARD THE SOCIAL STRUCTURE OF CHILDREN IN CLASSROOM (NO. II)

By Ogawa, Kazuo

Shimane University

I Problem

The purpose of this study is to analyze a teacher's attitude toward his pupils on the following two points :

1. How properly does a teacher observe the social structure of the class in his charge ?
2. What kind of children escape the teacher's observation ?

This second report deals with the second point, the first point having been taken up in the previous report.

II Procedures

Children above the third year grade (10 classes) of a primary school (15 classes) in Matsue City were

chosen as subjects. This is the same school as the one treated in the first report. The method of analysis was as follows :

Achievement of Studies We asked the teachers to rate the children in his charge into five degrees.

Personality—Sakakibara's Extroversion-Introversion Test—We asked the children to evaluate themselves.

—Personality Evaluation (Record of Behavior)—We asked the teachers to rate the children on 22 evaluation items.

III Results and Interpretation

The main results gained by converting all Raw Scores into Standard Scores(T-Scores)are as follows:

1. Most of the popular children who are observed fairly well by teachers are superior in achievement of studies and of more extroversion type.

2. The teachers are apt to pay more attention to the extroversion type of popular children in the classes.

3. Therefore, when there are a few children in the class who are inferior in achievement of studies, of introversion type, and yet popular among his friends, the teacher is likely to exclude them from the category of 'popular children.'

4. On the contrary, most of the rejected children are inferior in studies. However, when a teacher enumerates the rejected children in his class, he tends to overlook those whose achievement scores are extremely low.

5. There are sometimes more than a few rejected children in the class who are superior in studies. In such cases a teacher seems to make incorrect

evaluation.

6. The isolated children are almost never correctly observed by the teachers. This is due to the fact that the teachers seek them in those who are inferior in studies, and overlook many isolated children who are average or mediocre in studies.

7. When we analyze the reasons for isolation as pointed out by teachers and the degree of their positive errors, we find that the teachers cannot sufficiently differentiate the isolated children from the rejected ones. Most of the errors are made because the teachers take the obviously rejected children or the quasi-rejected ones for the isolated. There are few cases in which the teachers include quasi-isolated ones for the isolated.

8. In spite of our anticipation that the teachers will pay more attention to the extroverts, we now find the tendency is that the teacher's attitude is more influenced by the achievement of studies of the children, rather than their characters.

PLACEMENT OF PSYCHOLINGUISTICS IN THE LANGUAGE RESEARCH

By Muraishi, Shozo

National Language Research Institute

Psycholinguistics (or language psychology) is a science to establish how the language is controlled by the person who uses it. As a rule, general linguistics has a tendency to analyze the linguistic form and structure as "la Langue" by separating language from human behavior. However, the object of psycholinguistics is "le Parler". It approaches the rules and functions of communications in decoding and encoding messages.

Since psycholinguistics is an boundary area which relates linguistics with psychology, there are two aspects in its nature: one takes advantage of the psychological theory in the linguistic interpretation as a part of linguistics; the other takes advantage of

the linguistic facts in the psychological interpretation as a part of psychology. Historically, both points have been separated from each other.

When we compare modern psycholinguistics as indicated by Carroll, J. B. (1953), Miller, G. A. (1954) and Kainz, F. (1943~54) with the old psycholinguistics by Wundt, W. (1900~09) and others, we notice in the former the three following characteristics, at least:

1. Integration of psychological linguistics and psychology of language
2. Closer approach to the communications theory and group dynamics.
3. Establishment of scientific methodology.